

絆 求 め て

5月16日発行

文責 幼児教育専門員 久保田学

**資質向上講座「講演会」を実施しました！**

令和5年4月12日(水)、古林療育研究所社長 古林 紀哉先生を講師としてお迎えし、資質向上講座(講演会)をWEBで実施しました。テーマは、「発達障害の園児への具体的な日常支援について ~先生の支援習慣で園児の行動は変わります~」で、発達が気になる子どもへの日常的な対応についてお話をいただきました。園での活動が一段落した16時からの研修だったこともあり、331名と大勢の先生方にご参加いただくことができました。以下に研修後のレポートでお書きいただいた内容を紹介します。

<研修から学んだこと>

- 自分は専門家ではないが、学びを深め、日常的な具体的な支援を心がけたいと思います。そのための支援として、①普通児よりも発達障害児を褒める②これからすることの目標を見せる③ルールと順番を見せる④1日3分の個別指導をする⑤やりたいことは時間を決めてやらせる、ということはすぐにでも実際に取り組める事柄として取り組みたいです。
- 本研修をお聞きして学んだことは、沢山ありますが、1つピックアップして、普通児よりも発達障害児を褒めるということです。先生のおっしゃる通り発達障害の子どもは褒められるという経験が少ないように感じます。もちろん子どもは褒めて伸びる生き者だと思っています。成長が遅いと、褒められる回数が少ないので伸びません。また、普通の子どもの場合は自分を褒める能力があるため順調にスキルが伸びますが、発達障害の子どもは、自分を褒めたりしないのでスキルの伸びが遅いんだなと思いました。このことから、発達障害の子どもは周りが意識的に褒める必要があると感じました。日常の生活行動を褒める、行動の直後に褒めるなど例がありますが、1番なるほどなと思ったのは、手伝ってあげてできた時は、もっと褒めることです。手伝ってあげた時はネガティブになりがちですが、できたことを褒めると習慣が早くなるそうです。実践してみようと思いました。
- 先生のお話をきいて、ご褒美は新しい事を身につける必須の要素であると言う事を改めて感じ、学ぶ事ができました。先生のお話で『子どものことを褒めましたか?』という問いかけには『はい!』と自信をもって答えられましたが、『最後に褒めた事はどのような内容か』、『1時間にどれ位褒めているか』と問われるとしっかり思い出せない自分がいました。
自分ではしっかりやっているつもりでも、思い出して自身を持って答えられていないのだと感じ、自信をもって答えられるよう日々過ごしていけたらと思いました。
- 古林先生が何度も口にされていた専門家でないとなすべての支援はできないという言葉聞き、では自分には何ができるのだろうと考えました。このように研修で勉強することはもちろんですが、それだけでなくせめて園の中では子ども自身が自信を持って過ごせるように支援が出来れば良いなと思いました。又、「先生の悩み」「園の悩み」という項目で話を頂き、正直私たちが悩んでるということはあまり言っはいけないものと思っていたので、このように言っていただき、先生方と共有して解決することが最終的には子どものためになるのではないかと感じました。
- 先生の教えてくださった具体的な日常支援を行いたいです。この5つのことを教えていただいた時に、これは発達障害の園児に限らず、どの子にとっても、②や③は必要ではないかと思いました。ルールの提示として、○と×をイラスト込みで示したものを提示しました。食事面であったり、様々な日常の行動をそれで提示したのですが、とてもわかりやすく、多くの子が意識している姿があり、早速効果を実感しているところです。また、追加になる行動が目につきがちですが、褒めることを忘れずに心がけていこうと思います。自分の中で5つのことを忘れず、忘れそうな時には思い返しこれからも実践していきたいと思っています。

＜今後の保育実践に生かしたいこと＞

- 初めて、発達障害の子どもと関わった時、行動のすべてがわがままで、発達の遅れがある子どもとしか思えませんでした。研修を受けたり、本等を参考に学んだり、実際の子どもの目の前に関わって行くと、一人一人、特徴があって、個々に関わり、信頼関係が出来、経験を重ねたり、一日の流れが身につくと、集団の中でも過ごせる時間が増える事を経験しました。今回の先生の話から、他の子ども以上に関わり、叱らずに良いところや出来た事を認め、褒めたり、その子どもに目標を持たせたり、それに向かって行う事を教えて頂き、これなら、全体の中で、その子どもを認め、褒めていく事で、その子どもも成長し、回りの子どももその子どもに対する思いも変わってくるのではと思いました。発達障害のある子どもも他の子どもと一緒に楽しく園生活が過ごせる様、努力していきたいと思いました
- ルールと順番を見せるということに対しては、今までの自分の保育を振り返り、ついダメなことを伝えていたなと思いました。だめ！ではなくどうしたらいいかを伝えていけるように意識していきたいと思います。最後に、褒めるということですが、この講演を聞いたあとすぐに取り組みはじめました。数日間ですが、子どもたちも自信になり、嬉しそうな姿がみられ、さらに自分も気持ちに余裕を持って日々保育が出来ているなと感じました。どの支援も色々な子どもにとって良いものだと感じました。
- 古林先生の支援策の中で大きく取り上げられていた、視覚からの支援ですが、私たちも日々の保育の中で取り入れています。月齢が上がるにつれて、「もう出来るようになったから大丈夫だね。」と部分的に無くしてしまっていたことがありました。出来るようになったからではなく、持続していかなくてはいけないと教えて頂きました。以前の様に戻してさっそく保育するようにしました。また、おおまかな視覚支援だけでなく目標を立てて見せることもするようにしました。集団生活の中での個別指導の難しさは、グレーの子が複数人いたり発達障害の子もがクラス内に何人もいたりするので、1対1での毎日の指導は難しくありますが、交代で少しずつ取り入れていけたらと思いました。
- 研修後、早速【カモさんのイラストカード BOOK】と角丸トリマーを購入し、職員みんなで全職員分のイラストカードを制作しました。これまでは各々でイラストカードを作って使用していましたが、通年で同じものを使用した方が良かったことが分かり良かったです。水道前の鏡に【みずでぬらす】【せっけん】【てをあらう】のカードを貼ったところ、手を洗うことがキライだった知的障がいの子もが、ひとつひとつ指さし確認しながら、カードと同じようにする姿を見て、早速絶大な効果を感じました…！それと同時に、今までそうした具体的な手立てや、細かい配慮をしてこなかったことを反省しました。これまでは『やりたくない！』という行動を示す子に対して、じゃあ先生と一緒にやろう、と一緒にやることばかり考えてきましたが、子ども自身も、本当はひとりでやりたいし、やる力はあるのですね。大切なことに気付かされました。

先生方にお書きいただいたレポートを読ませていただきました。多くの先生のレポートに、「ほめる実践始めました。」「絵カードを終わったらはずすようにしました。」など、古林先生が研修で話されたことを始めているとの記載がありました。私は、昨年の資質向上研修で講師をお勤めいただいた、信州大学の本田 秀夫先生の著書「子どもの発達障害」に、“発達障害の子のほめ方・叱り方”という記載があったことを思い出しました。その中の「ほめる」について要点を載せてみました。参考にお読みください。

ほめる＝子どもの気持ちを汲み取り、共感すること

＜ほめ方のコツ＞

- ①年齢によりほめ方を変える
 - ・幼児期…どんどんほめる(あまり色々と考えない)
 - ・学童期…さりげなくほめる 例)やるじゃん! やったね!
*ただし、年齢の目安は、子どもにより違う
- ②動作を入れてほめる
 - ・ハイタッチ(話し言葉で物事を理解するのが苦手な子に有効)
(幼児期の子には特に有効)

よく、「〇〇さんは、ほめ上手ですね。」と言う言葉を耳にすることがあります。上手な人は、下心なしにほめる。だから、ほめられた人がおもわずうれしくなる。そんなほめ上手になるには、やはりたくさんほめる経験を積むことですね。(専門員)